高等学校

平　成　9　年　度

教育研究員研究報告書

地理歴史

東京都教育委員会

平成９年度

教育研究員（高校・地理歴史）名簿

科　目	所　　属	氏　　名
世界史	都立三田高等学校	住吉　貴之
	都立小山台高等学校	仮屋園　巌
	都立園芸高等学校	清水　篤
	都立井草高等学校	田中　久雄
	都立淵江高等学校	佐藤　義弘
	都立八王子北高等学校	上田　隆之
	都立立川高等学校	風間　睦子
	都立武蔵村山東高等学校	佐々木　義文
日本史	都立大山高等学校	大場　充
	都立府中東高等学校	弘田　隆彦
	都立第五商業高等学校	鵜飼　敦之
地　理	都立八潮高等学校	前川　信雄
	都立向島商業高等学校	米中　利明

担当　東京都教育庁指導部高等学校教育指導課　指導主事　宮本　久也

研　究　主　題

文化・社会の多様性・複合性や相互交流を理解するための力を育てる授業展開の工夫

目　　次

主題設定の理由と研究の経過 …… 2

Ⅰ　異なる文化の受容と衝突 …… 3

1　古代都市カルタゴの興亡 …… 3

2　太平天国の乱における思想 …… 4

3　日本の産業革命期における都市の近代化
―― 東京の城北地区を対象として ―― …… 6

4　満州農業移民 …… 8

5　中国近代における西洋文化の受容 …… 9

Ⅱ　異なる視点からみた交流と共生 …… 11

1　アフリカからみた文化史 …… 11

2　女性からみた近代日本の生活文化 …… 13

3　ポーランドからみた「列強」の抗争 …… 14

4　中国系移民からみた東南アジア諸国
― タイ、マレーシアを実例に ― …… 16

5　オセアニアのミニ国家・地域からみた人々の生活と文化 …… 18

Ⅲ　身近な素材を通してみた世界と日本 …… 20

1　絹織物業の伝播に関わる世界史 …… 20

2　食糧問題から考える世界 …… 21

3　米国籍企業を通して見た世界と日本 …… 23

研究主題

文化・社会の多様性・複合性や相互交流を理解するための力を育てる授業展開の工夫

主題設定の理由と研究の経過

交通・通信など科学技術の発達により、経済をはじめ様々な分野で「世界の一体化」が進む一方で、地域紛争は頻発し、諸国・諸地域間の経済格差や経済摩擦もやまない。そして、21世紀に向けて人類が立ち向かうべき課題も深刻なものとなっている。こうした社会を生きていくためには、①他者を理解し受容する②様々な角度から物事をみる③自らの意見をもった上で少数の意見をも尊重して合意を形成し、問題を解決するなどの姿勢が求められる。そこで、本部会では上記のような研究主題を設定し、以下の三つの視点から研究に取り組んだ。

Ⅰ　異なる文化の受容と衝突

歴史上、多くの民族・国家が、異なる文化や宗教を持つ人々と交流・衝突し、時には新たな発展をとげ、時には滅亡の道をたどってきた。様々な文化・宗教・言語・体制などを持った人々が交わるときの難しさや、素晴らしさを過去の多くの事例が語っている。そこでこのグループでは、ある文化の中に異文化が取り込まれていった事例として、「日本の産業革命期における農村と都市」、「太平天国の乱における思想」、「中国近代における西洋文化の受容」を、また異文化社会に対する無理解が民族的軋轢をもたらした事例として、「満州農業移民」、「古代国家カルタゴの興亡」をとりあげた。そしてその中から、国際社会における交流と相互理解の在り方を考えさせる授業展開の工夫を試みた。

Ⅱ　異なる視点からみた交流と共生

現代社会は、様々な文化・地域・民族との緊密かつ複雑な結びつきの上に成り立っている。しかし、日本人の意識の中には、従来あまり重視されてこなかった地域や国に対する偏見や、軽視されてきた集団に対する固定観念が依然として存在している。こういった偏見や固定観念を克服し、文化・社会の多様性・複合性や相互交流をより深く理解するには、多角的に「異なる視点」から歴史的過程や地理的特質をとらえなおす必要がある。そこでこのグループでは「アフリカ」、「女性」、「小国」、「中国系住民」という視点からみた五つのテーマを取り上げる。誤解や偏見をもたれやすい内容にも焦点をあて、相互理解や共生の在り方について考えることのできる力を育てる授業展開の工夫を試みた。

Ⅲ　身近な素材を通してみた世界と日本

現代の我々の社会は大量の情報や「モノ」に支えられ、便利で豊かな生活を享受できるようになったといわれるが、その反面、効率化、均一化、マニュアル化が推し進められ、創造性・探究心の欠如や人間関係の希薄さなどが生み出された。また、氾濫する情報や「モノ」は、物質的豊かさの実感を麻痺させ、「モノ」に対する感謝を忘れさせている。このような現在、まず身近な事物に対しての興味・関心を持ち、探究していく精神を育むことが求められている。そこでこのグループでは「絹織物業」「米国籍企業」「農業」が生み出すモノを素材に歴史の形成を複合的にとらえ、地理歴史への関心を持たせ、理解を深める授業展開の工夫を試みた。

Ⅰ 異なる文化の受容と衝突

1．古代国家カルタゴの興亡

(1) **教材として取り上げた理由**　紀元前 2,500年頃から、地中海東岸部に多くの都市国家を建設し、オリエント・地中海両世界に海洋商業覇権を樹立したフェニキア人。それらの都市の一つ、テュロス市が紀元前9世紀末、北アフリカに建設した植民市の代表格がカルタゴである。以後、紀元前2世紀後半まで地中海随一の大商業国家として栄えたカルタゴは、軍事力に頼らず、専ら商業経済活動を通じて異民族に富と文化を伝え、ギリシア・ローマ各文化圏との間にも深い相互交流を持った。しかしカルタゴは同時にギリシア・ローマから誤解され、更には3度に及ぶポエニ戦争の結果ローマによって滅ぼされた。カルタゴはなぜこのような運命を辿ったのか。異文化圏同士の衝突が互いの受容や理解に勝ってしまったのであろうか。このカルタゴ滅亡の悲劇を考察することにより、現代日本の状況、及び日本社会が今後進むべき道を、その遺された教訓の中から掘り起こすことをねらいとして本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は4時間構成の第4時限に当たる。第1時限では都市国家ローマの起源、及び当時のローマ周辺部地域における民族分布を、第2時限ではローマ共和政の発展、及びイタリア半島統一の過程を、第3時限ではポエニ戦争以前までのカルタゴ概略史、及びポエニ戦争を各々扱う。本時では「文化の相互交流・衝突」というテーマ史的な観点から、カルタゴとギリシア・ローマ各文化圏との相互交流と衝突、及びカルタゴの滅亡とそこから得る教訓を通じ、現代の日本と他国との文化交流推進に際し注目すべき点を導き出し、考察させる。学習指導要領では「世界史Ｂ」の「(1)文明の起こり」の「イ　地中海文明」で扱う。

(3) **展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・紀元前3世紀前半におけるカルタゴとローマ	○イタリア半島統一直前のローマがカルタゴとの間に交わした平和条約の内容に触れ、両者間の勢力均衡について確認する。 ○半島統一後、ローマの領土拡大の意志がシチリア、及び北アフリカに向けられたことを確認する。	・ワークシート ・資料「カルタゴ・ローマ間の平和条約」
展開	・カルタゴとギリシア・ローマ各文化圏との相互交流 ・両者の衝突	○カルタゴが、商業活動を通じて高度な文化をギリシア・ローマ各文化圏に伝える一方で、逆ルートの交流も盛んであったことを言語・宗教・政治機構・技術等、分野別の例から総合的に理解する。 ○古代地中海文化圏における相互文化交流の形態は東西（オリエント－ギリシア－ローマ）横軸のみならず、南北（カルタゴ－ギリシア・ローマ）縦軸の関係からも考察すべきであることを理解する。 ○相互交流の中で、ひたすら富の追求に余念のなか	・ワークシート（白地図） ・資料「カルタゴの商業活動、その様相」 ・図版「カルタゴの工芸品」 ・資料「カルタ

展開		ったカルタゴ、それをギリシア・ローマが否定的に見ていた状況、及びその理由を解明し、理解する。	ゴに対する批判例」
	・ハンニバルの国政改革とローマ側の警戒心の萌芽	○将軍ハンニバルが軍人であると同時に民主政を推進した有能な政治家でもあったこと、またそれ故にローマが彼の人となりを恐れたことを理解する。 ○第2次戦役後、カルタゴが不利な条約内容を遵守し、ローマに対してひたすら誠実な外交を展開する一方、以前にも勝る繁栄を遂げたことを理解する。	・資料「ローマ人に恐れられたハンニバル」 ・資料「第2次戦役後の両者間の条約内容」
	・ローマ側の警戒心の増大	○カトーに代表される反カルタゴ強硬論がローマ社会の中に現れてきた原因を理解する。 ○また同時にカルタゴをよきライバルと見なし、共存共栄を願った穏健派も存在したことを理解する。	・資料「カトーの強硬論とスキピオ＝ナシカの勢力均衡論」
	・カルタゴ滅亡の前夜	○隣国ヌミディア国王マッシニッサがローマの庇護下、カルタゴへ度々侵入し、平和的解決を望んでいたカルタゴの忍耐が限界に達したことを理解する。	・資料「マッシニッサのカルタゴへの侵入」
	・カルタゴの滅亡	○第3次戦役が、カルタゴの対ヌミディア防衛戦を条約違反と見なしたローマ側の一方的な通牒により始まったこと、及びカルタゴ側はこれに対し最後まで平和共存への道を模索していたことを理解する。	・資料「カルタゴ使節の平和への懇願とローマ側の最後通牒」
まとめ	・文化交流と衝突	○カルタゴとローマは同時並行して存在し、また相互の無理解による衝突が、時として受容を凌ぐことを理解する。	・ワークシート（まとめ）
	・ポエニ戦争	○古代地中海世界における帝国主義国家と商業主義国家との宿命的な対決でもあったことを理解する。	
	・現代日本の今後の課題	○物質文明や経済活動のみを過度に重視する危険性を、カルタゴの遺した教訓から学び、考察する。	・感想文の作成

(4) 評価の観点　①古代地中海世界における文化交流の形態が、東西のみならず南北の機軸からも理解できたか。②ギリシア・ローマが、カルタゴに対して抱いた警戒心の基となった原因を理解できたか。③物質文明を享受し、産業立国として繁栄してきた現代の日本社会が抱える問題、及び今後の日本が他国・他民族との交流を深めて行くに際し、どの様な点に注目すべきであるのかを考えさせる場となり得たか。

(5) 指導上の留意点　①参考文献からの引用は、生徒が理解しやすく、関心を持てるようにその内容を精選する。②相互文化交流に関しては、あらかじめ記入しやすい地図を用意する。③感想文を書かせるにあたっては、あらかじめ着目点を説明しておく。

2．太平天国の乱における思想

(1) 教材として取り上げた理由　中国の植民地問題の発端となったのはアヘン戦争であり、

その後に続く太平天国の乱・アロー戦争の歴史はまさに中国の半植民地化が進められていった過程であった。これらの中で中国は、西欧近代文化の優秀性に触れて従来の中華思想・儒教倫理を見直さざるを得ず、西欧近代文化を受容する姿勢がとられた。そこで、この激動の時代にあって中国の人々が、異なる文化や宗教をもつ人々とどのように交流・衝突していったのかをみることによって、現代の国際社会における交流と相互理解のありかたについて考察を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は4時間構成の第2時限に当たる。第1時限では「清の衰退とアヘン戦争」を取り上げる。本時では、太平天国の乱を取り上げ、この運動の本質を理解するための重要な鍵になると思われる洪秀全や太平天国の乱の思想（特にキリスト教の影響を中心に）を探り、また、その思想がどのような影響をこの運動に与えたのかについて考察させる。第3時限では「太平天国の乱の意義とアロー戦争」、第4時限では「ロシアの中国周辺への進出、明治維新と朝鮮の開港」を取り上げる。本時の内容は、学習指導要領では「世界史A」の「(3)19世紀の形成と展開」の「ウ　アジア諸国の変貌と日本」、「世界史B」の「(5)近代と世界の変容」の「ウ　アジア諸国とヨーロッパの進出」で扱う。

(3) **展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・中国の農民反乱について復習する	○中国の農民反乱が、各時代の衰退期に必ずと言っていいほど起こっている事実を確認し、その共通する部分は何であるかを理解する。 ○宗教反乱においては、極めて観念的であるが、いずれも宗教的理想世界を現実界に実現しよう、という期待をもっていたことを理解する。	・資料「中国の今までの農民反乱」
展開	・洪秀全について	○洪秀全の生い立ちについて理解する。 客家の出身で地元の人々からは差別された。 科挙の試験を受け儒教的素養が身についていた。	・資料「洪秀全」
	・洪秀全とキリスト教との出会い	○1837年の幻想体験から「勧世良言」との出会いによって、上帝に命を受けたのだと言う確信を得たということを理解する。	・資料「洪秀全の幻想」
	・太平天国の思想	○中国で唯一キリスト教主義的な思想内容を取り入れたことを理解する。 ○太平天国の理想が多くの人々に期待されたことを理解する。 ①新しい救いの神＝天父上主皇上帝に人々は現在の境遇からの救いを求めた。 ②土地の均分・男女平等・弁髪禁止・纏足禁止などに人々は共鳴し期待をもった。	・資料「天条十款」「モーセの十戒」「太平軍軍律」 「天朝田畝制度」「太平天国についての民間伝承」
	・太平天国の	○太平天国は多くの人々に期待されながらも失敗し	

展開	崩壊	てしまうがその理由を考えてみる。 ①思想の限界 ②制度の不徹底 土地の均分は実際は行われなかった。 平等はうたってはいても、官尊民卑であり、天王・東王・西王・南王・北王・翼王などの存在もあった。 ③指導者たちの内部対立 ④「太平天国はキリスト教国」と思い初期には支援した列強がアロー戦争後には武力干渉政策に転換していった。 ⑤郷勇の活躍	・資料「幼学詩」「上帝」
まとめ	・太平天国の思想	○洪秀全はキリスト教思想を取り入れたが、全体を貫いている精神は儒教思想とそれよりもっと古い上帝の信仰であったことを理解する。	

(4) **評価の観点**　①太平天国の掲げた思想を理解できたか。②なぜ太平天国に多くの人々が参加したのか理解できたか。③なぜ太平天国は失敗したのか理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①難解な資料については、現代語訳した資料を提示するよう配慮する。②資料の読みとりは内容を理解できるよう分かり易い解説を加え、取り上げる箇所の精選も考える。

3．日本の産業革命期における都市の近代化－東京の城北地区を対象として－

(1) **教材として取り上げた理由**　人は異文化に対して抵抗感と興味関心という背反する感情をもつものであるが、ときには無批判的に受け入れようとする場合もある。近代日本が欧米の技術・制度にふれたときもほとんど一方的な受容だったといえよう。現代の日本がいまだ近代ヨーロッパに発生した工業文化に強く影響されていることを考えると、その受容と消化の過程を確認し問題点を点検する作業はなおざりにするべきではない。ここでは新しく導入された近代工業を基軸に都市が新しい発展をとげていく過程を通して、明治期の人々が近代化を受容していった様子を考察し、その急速な近代化がひずみをともなっていた情況を理解させ、問題点を考えさせることをねらいとして本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は2時間構成の第2時限にあたる。第1時限では「日本の産業革命」として日清戦争から日露戦争にかけての産業の動向（主に重工業政策）をとりあげる。本時では、日本の産業革命は地域的にどのような影響を与えていたのかを東京の城北地区（現在の北区・板橋区・文京区など）を対象に考察させる。同じ城北地区でも都市化が急速に進んだ地域と、そうでない地域があること、またその理由を明確にし近代社会での発展の過程を理解させる。学習指導要領では「日本史　A」の「(4)近代日本の形成と展開」の「ウ近代産業の発展と国民の生活」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・明治期の人口動向	○明治期の城北地区における人口増減グラフをもとに、人口の増減が起きた理由や各区の違いについて考える。	・城北地区の人口統計グラフ ・年表
展開	・産業革命直前の状況 ・日清戦争頃 ・日露戦争頃	○明治初年の城北地区は大部分が農村であったが、一部で工場を中心に集落ができつつあった情況を知る。 ○富国強兵のため設立された小石川の砲兵工廠・板橋の火薬工場・王子の製紙工場・鹿島紡績所のような初期の大規模工場がみな郊外の河川沿いに立地したことを理解する。また工場の敷地が現在どのように利用されているかを知り関心を高める。 ○工場労働者の多くは地方の農村出身者で請負制度に基づいたその生活に余裕が無かったことを認識し、当時の都市発展の限界や問題点を理解する。 ○産業革命期の城北地区では宅地化が急速に進んだ情況を理解し、その理由を推測する。 ①主要工場の拡大が戦争や輸出入と連動し、労働人口の増加に結びついていたこと。 ②日露戦争期の好景気を背景に、労働者にもゆとりをもった層が発生し、労働者層の多様化が都市の拡大・変質をもたらしたこと。 ③都市交通に鉄道を組み込むことで、勤労者の通勤圏が広がり、新しく発生した都市中産階級の成立を助けたこと。 ○明治期の都市社会は経済不安などに影響を受けやく、生活基盤が脆弱であったことを理解する。	・地図1 ・図「王子製糸全景」 ・地券 ・資料「日本之下層社会」 ・地図2 ・資料「砲兵工廠の拡大」 ・資料「久世山の夏草・郊外の家」 ・資料「東京市統計書」
まとめ	・大正初期の東京府内	○明治末から大正初期にかけての城北地区は工業地・住宅地・農地と地域格差ができたことを理解する。特に増加した人口の多くが新しいタイプの給与生活者だったことを理解し、大正文化を支えた社会階層の発生を認識する。	・資料「北豊島郡誌」

(4) **評価の観点**　①東京の都市発達が産業革命によって引き起こされたことが理解できたか。②急速に発達した都市社会は経済の影響を受けやすかったことを理解できたか。③城北地区の都市化がどのような過程で成立していったのか理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①資料はグラフに改め、変化を読取りやすいようにしておく。②「近代化」の担い手が中産階級の成長にあったことを指摘し事後の学習につなげる。

4．満州農業移民

(1) **教材として取り上げた理由**　満州農業移民は、満州国の治安維持と対ソ戦備、国内農村の疲弊救済を目的として日本政府により計画された。1932（昭和７）年からの試験移民を経て、広田内閣のもとで本格化し、終戦までの間、国策として強力に進められた。入植地の大部分は、安価で強制買収したものであった。入植した移民団の多くは、支配者意識、異文化に対する無理解など、いくつかの要因が重なり、土地を追われた中国民衆と民族的軋轢を生じた。その結果、中国民衆から強い反発を受けることとなり、終戦時の混乱の中で、多くの移民団がソ連軍の攻撃に加えて中国民衆の襲撃を受け、戦死・自決・病死・餓死などに追い込まれた。そして、このような状況下で数多くの中国残留孤児・婦人が生み出された。中国残留孤児・婦人の帰国・自立問題を考える上でも、その原点となった満州農業移民とその民族的軋轢・終戦時の悲劇について学習し、そのことを通じて文化・社会の多様性を認め、相互交流していく姿勢を考えさせることをねらいとして本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は、３時間構成の第３時限にあたる。第１時限では「金解禁と世界恐慌」、第２時限では「満州事変と満州国」を扱う。農村の疲弊・日本の大陸政策の学習をうけて、本時では満州農業移民の概要を捉え、現代社会にどのような影響を与えているかを理解させる。その上で、移民団入植によって生じた民族的軋轢と終戦時の悲劇を事例として取り上げ、異文化を認め、相互交流していく姿勢を考えさせる。本時の内容は、学習指導要領では「日本史Ａ」の「(4)近代日本の形成と展開」の「オ　両大戦をめぐる国際情勢と日本」、「日本史Ｂ」の「(6)両世界大戦と日本」の「ウ　第二次世界大戦と日本」で扱う。

(3) **展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・中国残留孤児・婦人とその現状	○中国残留孤児・婦人とその社会的現状について理解し、その発生に対して着目する。	・資料「朝日新聞」
展開	・満州農業移民の始まりとその目的	○第２時限で扱った日本の大陸政策を概観する。 ○1932（昭和７）年の在郷軍人を中心とした試験移民に始まり、百万戸送出計画のもとで分村・分郷移民を中心に満蒙開拓青少年義勇軍や大陸の花嫁などが送出されたことを理解する。 ○満州農業移民は、満州国においては治安維持と対ソ戦備を目的とし、国内的には農山漁村経済更生政策の一手段であったことを理解する。	・写真 ・年表「満州開拓関係年表」 ・地図「満州開拓民入植図」
	・入植地獲得の方法と営農	○入植地の大部分は、満州拓殖公社などにより既耕地を含む広大な土地を強制的に安価で買収したもの	・資料「広島県満州開拓史」

展開	方法 ・移民と中国民衆との軋轢・衝突 ・終戦と逃避行	であることを理解する。 ○自家労働力の貧弱な移民の営農方法は、土地を追われた中国民衆や満州在住の朝鮮民衆の雇用や小作に委ねられていたことを理解する。 ○土地買収に反抗する中国民衆の移民団襲撃がある一方、移民の中国民衆に対する問題行動もあったことを理解する。 ○中国民衆と融和し、開拓を行った移民団について理解する。 ○根こそぎ召集、ソ連参戦、関東軍崩壊という状況での逃避行と、それに対する、移民団への襲撃あるいは救済などといった中国民衆の対応について理解する。 ○中国残留孤児・婦人の生じた状況を理解する。	・資料「満蒙開拓青少年義勇軍」 ・資料「満州国」 ・資料「未完の旅路」 ・資料「祖国よ」
まとめ	・軋轢の要因と異文化との相互交流	○満州農業移民と中国民衆との民族的軋轢の要因、そして異文化を認め、相互交流していく姿勢について考える。	・資料「日中十五年戦争史」

(4) **評価の観点**　①満州農業移民の目的・入植地獲得方法・営農方法などを理解できたか。②移民団と中国民衆との軋轢・衝突が、終戦時の悲劇の一因となったことを理解できたか。③異文化を認め、相互交流する姿勢について考えたか。

(5) **指導上の留意点**　①臨場感のある資料提供と、資料読解の為の時間を十分に確保し、生徒にしっかり考えさせるように配慮する。②軋轢と融和、襲撃と救済など、資料提示が一面的にならないよう配慮する。

5．中国近代における西欧文化の受容

(1) **教材としてとりあげた理由**　唐代の三夷教の流行や、明清時代のイエズス会宣教師による西洋科学の導入など、中国は多くの異文化を取り込んできた。ただし、それは高度な文化を誇る中国主導でのことであった。ところが、アヘン戦争以後事態は一変する。中国は西欧近代文化の優秀性を認識させられ、従来とは異なる形での文化受容を余儀なくされた。「中体西用」のスローガンをかかげて始まった洋務運動、立憲政体の導入をはかった変法自強運動、儒教道徳の打破を目指した新文化運動などは、西欧の文化を受容し、中国を近代国家として再生しようとするものである。亡国の危機の克服につとめた指導者たちの、思想と生涯をたどる中から時代を概観し、異なる文化の受容と衝突について考えることをねらいとして、本教材をとりあげた。

(2) **本時のねらい**　本時は4時間構成の第4時限にあたる。第1時限では李鴻章を中心に洋務運動の時代を、第2時限では康有為の思想から変法自強運動の時代を、第3時限では孫文の活動を通して辛亥革命を扱う。本時では、陳独秀に焦点をあて、新文化運動から五・四運

動の時代をとりあげる。彼は伝統的教育を受けたが、西欧文化に傾倒して「民主と科学」を提唱、新文化運動の旗手となり、さらに中国共産党の創設者の一人ともなった。常に新しい思想を模索し、自己変革を繰り返した知識人の生涯と思想の変遷を辿り、西欧文化の受容と、新しい中国の思想的支柱の形成について考察させる。学習指導要領では「世界史B」の「(5)近代と世界の変容」の「ウ　アジア諸国とヨーロッパの進出」「エ　帝国主義とアジア・アフリカ」で扱う。

(3)　展開例

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・陳独秀の生涯	○陳独秀は、伝統的知識人としての教育を受けたが、やがて西欧文化を学び、辛亥革命に参加し、革命の挫折後は新文化運動の旗手となり、五・四運動後に中国共産党を設立したことを理解する。	・資料　年表
展開	・辛亥革命の挫折 ・新文化運動の展開 ・五・四運動のはじまり ・中国共産党の設立	○陳独秀は辛亥革命で安徽省都督の秘書長をつとめたが、袁世凱の弾圧で日本に亡命したことを知る。 ○辛亥革命の挫折が、人々に大きな失望感を与えたことを理解する。 ○1915年、陳独秀は上海で雑誌『新青年』を創刊し、国民の意識改革に乗り出したことを理解する。 ○陳独秀が西欧文化を理想化した背景を考察する。 ・伝統的思想を排除する武器としての西欧文化。 ○『新青年』に胡適・魯迅・李大釗らが論陣を張り、儒教の束縛からの解放を主張したことを理解する。 ○パリ講和会議に反対して五・四運動が始まり、全国的な反帝国主義運動に発展したことを理解する。 ○陳独秀が、啓蒙活動から社会変革をめざす運動に転じる決意を固めた背景を考察する。 ①パリ講和会議に対する期待と失望、西欧の民主主義に対する認識の変化。 ②組織された大衆の力の認識。 ○五・四運動後、ロシア革命と「社会主義」の理論が注目を集めるようになったことを理解する。 ○ロシア革命の意義を評価した陳独秀が、李大釗の紹介でコミンテルンの代表と接触し、1921年、上海で中国共産党を設立したことを理解する。	・資料「青年に告ぐ」抜粋 ・資料「文学改良芻議」抜粋 ・資料「山東問題と国民の覚悟」抜粋
まと	・新文化運動と五・四運動の評価	○陳独秀は革命指導の責任を問われ、1927年に失脚し、29年には共産党から除名された。中国における彼の否定的評価について考察する。	・資料　年表

め		○新文化運動と五・四運動が、新しい中国建設にどのような役割を果たしたかを考察する。	

(4) **評価の観点**　①新文化運動から五・四運動期の、中国の人々の西欧文化に対する姿勢を理解できたか。②パリ講和会議の結果が、中国の人々に与えた影響を理解できたか。③新中国の思想的支柱となる社会主義が受容された経過を理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①提示する資料から思想の特色が読みとれるよう、抜粋する部分の選定に留意する。②波乱に富んだ生涯を送った思想家・革命家を追うことで、時代の状況を考察できるように留意する。

Ⅱ 異なる視点からみた交流と共生

1．アフリカからみた文化史

(1) **教材として取り上げた理由**　アフリカ史は、奴隷貿易や植民地化など外からの影響について論じられることは多くても、この文化圏の主体性について扱われる機会は少ない。この授業では中南アフリカ文化圏の独自性や多様性、他の文化圏との相互交流から生み出された主体的な文化形成について、生徒に理解させることをねらいとしている。

なお、この教材ではサハラ以南の地域を扱うものとする。

(2) **本時のねらい**　本時は世界史Aにおいては「(1)諸文明の歴史的特質」の「イ　中国文化～オ　キリスト教文化」と併存するかたちで(1)の中にアフリカ文化を設定し、世界史Bにおいては、前半の文化圏学習のなかに「アフリカ文化圏」を設定するかたちで1時間の授業として構成する。アフリカ文化の多様性や独自性、普遍性を、食文化、音楽、服飾、記録や伝達の手段、建築などの具体例を通じて理解させるとともに、中南アフリカ文化が、他の文化圏との交流によって影響を受けるなかで、主体的で複合的な文化を生み出した点や、世界の他の地域の文化に多くの影響を与えた点を理解させる。

(3) **展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・アフリカのガイダンスと人類の誕生	○地図を見ながら、アフリカの位置や概念とともに、多様な民族が生活していることを知る。またアフリカで人類が誕生し、狩猟採集が始まった点を復習する。	・地図・絵地図 ・ワークシート ・サン族の狩猟具など
展開	①農作物（農耕の伝播と礼の文化）	○アフリカ起源の農作物について考察する。 ○多様な食のあり方について知り、他の文化圏と農作物の相互伝播があったことを理解する。 ○資料を読み、エチオピアで来客にコーヒーを出す時に、「味」以外に何が大切かを考察する。	・コーラの実 ・コーヒー ・料理の写真 ・「もの食う人々」

展開	②音楽 （現代音楽への影響）	○楽器にふれ、音楽を聞くことで、この地の音楽についてイメージを高め、アフリカ音楽の現代音楽への影響についての教師の説明を聞く。	・ムビラ（楽器） ・Rythmes Africans（CD）
	③服飾 （複合的な文化の形成）	○様々な民族衣装の写真を見て、説明を聞くなかで、アフリカの諸民族が他の地域との交流のなかで、多様で独自の服飾文化を作りあげていったことに気づく。	・ンデベレ族の女性ポスターとビーズ ・サヘルの民族衣装 ・ヘレロ族の写真など
	④無文字社会の特質と機能	○③で紹介された民族の多くが伝統的には文字を持たなかったことを理解する。 ○我々の社会で文字はどのような役割を果たしているのかを考察する。 ○写真や資料などから、語り部の役割や、文字以外の手段で知識や情報を伝達・記録・継承するための多様な方法があることを理解する。 ○文字が必要とされなかった理由を考察する。 ○文字の相対性や、文字の発生の起源などについての教師の説明を聞く。	・Le Griot（語り部を題材にした絵本） ・ダホメー王国の王アップリケ ・「無文字社会の歴史」（太鼓ことばによる歴史伝承） ・太鼓
	⑤建築と都市 （交易と文化交流）	○各地の建築や都市文化についての写真を見て説明を聞くなかで、地図を参照にこれらの都市が特にサヘルやスワヒリなどサハラ砂漠やインド洋に接する所に分布していることに気づく。 ○交易の様子を示した地図等から、交易とともに文化交流が行われ、創造された点に気づく。	・各地の遺跡の写真のカラーコピーなど ・岩塩、陶磁器など当時の交易品
まとめ	・アフリカ文化をめぐる相互交流	○本日学習したさまざまな文化を①アフリカ起源の独自性の強い文化②他の地域からの文化や文物の流入に影響されて、独自に展開された文化、③アフリカ起源で世界に広がった文化、の三つに分類・整理するなかで文化の相互交流について具体的に認識する。 ○③の具体例として現代美術やファッションについての教師の説明を聞くなかで、身のまわりにアフリカ起源の文化が意外に多く存在していることを再認識する。	・ワークシート ・ピカソの「アビニョンの娘たち」の絵 ・近頃の原宿風ファッションの写真など

(4) **評価の観点**　①アフリカが多様で独自の文化を生み出したということを、具体例を通じて理解できたか。特に無文字社会の特性について理解できたか。②アフリカと他の文化圏との相互交流によって多様な文化が生み出されたことを具体的に理解できたか。③アフリカに対して、より豊かな感情で接することができるようになったか。

(5) **指導上の留意点**　①資料については提示の方法に特に留意する。②アフリカに対して生徒が持っている偏見や情報不足を是正するように努めるとともに、アフリカの文化や住人に対して興味・関心を持たせるよう留意する。

2．女性からみた近代日本の生活文化

(1) **教材として取り上げた理由**　現代社会において男女は平等としながらも、依然として女性への差別・偏見は大きい。男女の労働面における役割の差は縮少してきているが、社会通念の中に「男は仕事、女は家庭」という固定的な性別による役割分業意識が根強く引き継がれている。これらは現代にも少なからず残存する「家」制度に基づく社会的な慣習によるものである。男性が国家のため、社会のため、妻子のために生きてきたとされるその傍らで女性はこの「家」の中でどのような立場におかれて生きてきたのかを理解させ、男女のそれぞれの生き方の多様性や共生の在り方を考えさせることをねらいとして本教材を取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は、3時間構成の第2時限に当たる。第1時限では、産業革命と女子労働について扱う。本時では、「家」制度下における女性の地位や役割を理解させる。また、産業の発展に伴い、女性が社会に進出することにより「家」に従属する女性像を乗り越え、「家」制度を揺り動かす役割を持っていったことを理解させる。その一方で性別役割分業観がはっきりしたことも理解させる。第3時限では、大正デモクラシー期を中心として婦人解放運動について扱う。学習指導要領では「日本史A」の「(4)近代日本の形成と展開」の「ウ　近代産業の発展と国民の生活」、「日本史B」の「(5)近代日本の形成とアジア」の「エ　近代文化の発展と都市や農村の生活」で扱う。

(3) **展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・現代生活における「家」について	○結婚式や墓から現代生活の身の回りに残る「家」について理解する。 ○「家」が個人にどのような規制をもたらしているのかを考える。	・写真
展開	・女性の社会的法的な地位について ・主婦権について	○封建制度の名残りである道徳観が女性を「家」に縛りつけていたことを理解する。 ○旧民法が制定されたことにより、男性優位の家父長権、相続権や「家」制度が法的に認められ、女性の生活が極端に規制されたことを理解する。 ○炉の座における主婦の位置や呼称から農村では女性の労働力が重要視され、「家」の中での主婦の地	・資料「女大学」女今川教訓双六」 ・資料「法学新報」「回想コラム」 ・資料「炉の座順図・呼称」

展開	・暮らしの変化と新しい家庭観 ・女子教育の普及と職業婦人の増加	位が認められていたことを理解する。 ○日露戦争、第一次大戦後の経済の進展に伴い、女性をとりまく暮らしが次第に変化していったことを理解する。 ①都市化の進行と消費生活の拡大に伴い、妻が家事万端を整える新しい主婦スタイルが生みだされたこと。 ②水道などの普及により、女性の家事労働が軽減され、余暇時間が生まれたこと。 ③女性雑誌の創刊は新しい女性への情報源としての大きな役割を果たしたこと。 ○生活が変化する一方で男女の役割分業がはっきりしていったことを理解する。 ○女学校の増加は、国家の意図する良妻賢母像を超える女性をも生み出していったことを理解する。 ○オフィス業務や交通・通信産業などの拡大に伴い様々な職種の職業婦人が飛躍的に増えたことを理解する。 ○結婚して「家」を支えるという主婦の役割にとどまらない生き方を選択しようとする女性が生まれたことを理解する。	・資料「婦人之友」 ・資料「日本水道史」「台所図」 ・資料「主婦之友」「婦人公論」 ・資料「女訓十カ条」「学制百年史」 ・「婦人公論」
まとめ	・様々な生き方と男女の共生のあり方	○性別による役割分業観を見直し、男女がそれぞれ固有の個性や能力を持ち、多様な生き方の可能性があることを理解する。 ○今後の男女の共生の在り方について考察する。	

(4) 評価の観点　①「家」制度が女性の個性や能力の発揮を制限し、社会参加に制約をもたらしていたことを理解することができたか。②資本主義の発展に伴い、女性の解放が徐々に進んだ一方で男女の役割分業が進んだことを理解できたか。

(5) 指導上の留意点　①資料から女性の生活をより具体的にイメージできるように配慮する。②女性問題は単に女性のみの問題ではなく、男性の生き方にもかかわるものであることに気づくように配慮する。

3．ポーランドからみた「列強」の抗争

(1) 教材として取り上げた理由　一般的な世界史学習では、帝国主義の時代を植民地獲得をめぐる欧米「列強」間の対立、抗争という視点から展開していく。しかし、ヨーロッパ諸国の中でも「列強」による支配に苦しめられ、それに対する民族運動を展開している「小国」

も存在していたのである。ここでは、そのような「小国」としてロシア・ドイツ・オーストリアの3国に分割されていたポーランドを取り上げ、ポーランドが日露戦争という「列強」による抗争の中で、どのようにして第一次世界大戦後の独立回復につながる民族運動を展開していったかを教材として取り上げた。

(2) 本時のねらい　日露戦争、ロシア第一革命当時の世界情勢を2時間構成で扱い、本時は2時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、日露戦争に至る国際情勢と戦争の経過、ロシア第一革命の勃発、日露戦争の結果を学習する。本時では、日露戦争はポーランド側からみれば、独立を達成する機会であり、日本との軍事協力を求めたが失敗したこと、しかし、ロシア領ポーランドがロシア第一革命の中心地域となり、ロシア第一革命中のポーランドの民族運動が第一次世界大戦後の独立回復につながったことを理解させる。学習指導要領では「世界史B」の「(5)近代と世界の変容」の「エ　帝国主義とアジア・アフリカ」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・日本とポーランドの位置	○日本とポーランドがロシアをはさんで東西に位置していることを確認する。	・資料「世界史図表」
	・著名なポーランド人の外国での活躍	○コペルニクス、ショパン、キュリー夫人を取り上げ、後者2名が外国で活躍したのはポーランドという国が失われたからだということを理解する。	・資料「ポーランドの紙幣」
	・ポーランド3分割	○当時のポーランドが、ロシア・ドイツ・オーストリアによって3分割されていたことを理解する。	・作業「3分割地域」の色分け
展開	・ポーランド民族運動の課題	○コシチューシコの蜂起を取り上げ、農民の協力を得られずに失敗していたことを理解する。	・資料「ポーランドの紙幣」
	・日露戦争の勃発	○前時に学習したことを確認する。	・ワークシート
	・日本との軍事協力の失敗	○ロシアからの独立を勝ち取ろうと、日本との軍事協力をめざしたが、日本側がヨーロッパでの複雑な国際問題に巻き込まれることを恐れたため、部分的にしか実現しなかったことを理解する。	・資料「ポーランドが示した軍事協力の内容」
	・ロシア第一革命の勃発	○前時に学習したことを確認する。	・ワークシート
	・労働者によるゼネストと武力闘争の勃発	○ロシア帝国内の労働者によるストライキの中心が工業の発達していたロシア領ポーランドであったこと、第一革命中最初の労働者による武力闘争がロシア領ポーランドで最も巨大企業が多く、多数の労働者が居住していたウッチで起きたことを理解する。	・資料「ロシア領ポーランドの工業生産を示す地図」「ロシアアのストライキに占めるロシア

			領ポーランドの比率」
展開	・国会開設 ・学校ボイコット運動 ・ポーランド語による授業の実現 ・農民運動と革命の連動	○ロシア皇帝が国会開設の約束を発布 ○キュリー夫人を例にポーランド語による授業ができなかったことを紹介。それを求めて学校ボイコット運動が展開されたことを理解する。 ○科目によってはポーランド語による授業が実現したことを理解する。 ○農村の行政用語としてのポーランド語の使用を求める民族運動が、ロシア領ポーランドの 2/3の村に広がったことを理解する。	・ワークシート ・資料「キュリー夫人の伝記より」 ・資料「ポーランド語による授業を行う科目」 ・ワークシート
まとめ	・第1次大戦後の独立回復につながる民族運動の高揚	○革命自体は、ロシアによって鎮圧されたが、ポーランド人労働者の生活水準は、日露戦争以前より向上し、ロシア第一革命中に獲得した諸権利によってポーランド人の政治的、社会的、民族的な意識が高まったことを理解する。	・ワークシート

(4) **評価の観点**　①日露戦争中に日本の軍事協力を求めた、当時のポーランドの政治状況を理解できたか。②ロシア第一革命の中心がロシア領ポーランドであり、革命の結果ポーランド人の民族運動が高揚していったことが、第1次世界大戦後の独立回復につながることを理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　日露戦争、ロシア第一革命の経緯とポーランドの民族運動の展開とが相互に関連していることを、生徒が理解できるように年表を活用する。

4．中国系住民からみた東南アジア諸国　～タイ、マレーシアを実例に～

(1) **教材として取り上げた理由**　現代の世界では、異なる民族が同一の国で共生してゆく例が数多く存在する。しかし、それぞれの国内での状況をみると、移住してきた民族が先住民族と融合している国もあるが、融合できずに先住民族やその他の民族と対立している国も多い。今回の研究では、中国とインドという地理的に重要な地域の間に位置し、多くの民族が移住して複雑な社会を形成している東南アジア諸国において、その海外進出や経済発展が世界的に注目されている中国系住民の進出と進出先の社会への対応の違いを、移住人数が多いタイとマレーシアを例に比較し、東南アジアにおける異なる民族の共生についての考察を深めることを目標とする。

(2) **本時のねらい**　本時は、3時間構成の第2時限に当たる。第1時限では、民族・宗教の分布を中心にした「東南アジア諸国の概略」について理解させる。本時では、東南アジアに最も多く移住し、社会的な影響も大きい中国系住民と進出先の社会との関係を、タイとマレーシアを事例として比較し、東南アジア諸国における異なる民族の共生を考察する。第3時

限では、東南アジア諸国連合（ＡＳＥＡＮ）などを通して「世界の中の東南アジア」について理解させる。学習指導要領では、地理Ａの「(2)世界の人々と生活・文化の交流」の「イ 諸民族の生活・文化の地域性」で、または地理Ｂの「(4)世界と日本」の「ア　世界の地域区分と地域」で、いずれも「東南アジア」を取り上げる際に扱う。

(3)　展開例

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・東南アジア諸都市の中国人街（チャイナタウン）の分布	○バンコクの中心部に中国人街（チャイナタウン）が位置することを確認し、中国系住民がタイの社会の中で重要な位置を占めることを考えさせる。	・同縮尺のバンコクと東京の市街地図の比較
展開	・世界の中国系住民の分布 ・東南アジア諸国の中国系住民の全人口に占める割合 ・中国系住民の職業別就業人口 ・中国系住民とタイ・マレーシア社会	○中国系住民の移住先が世界の中でも東南アジア諸国に集中している点を理解する。 ○中国系住民が東南アジア各国の人口の10～30％を占めるが、国によって割合が相当異なる点を理解する。 ○中国系住民が、東南アジア諸国で商業・金融といった面で強い影響力を持っている点を理解する。 ○タイ・マレーシア両国における中国系住民の意識の違いを理解する。 ○中国系住民とタイ・マレーシアの社会政策との関係を理解する ①タイの中国系住民融合政策 ②マレーシアのブミプトラ（土地の子）政策 ○マレーシアとタイの中国系住民に対する政策の違いの背景について理解する ①両国の教育制度について ②両国の先住民族の宗教の違いについて	・ワークシート ・統計「華人統計年鑑」 ・ワークシート ・統計「Sixth Malaysia Plan ・資料「タイ、マレーシアの中国系住民」 ・資料「マレー＝ジレンマ」 ・ワークシート資料「タイ、マレーシアの教育制度と言語」 ・資料「マレーシアにおける民族別の食習慣の違い」
まとめ	・民族の共生からみた東南アジア諸国	○東南アジアには、様々な民族構成をもつ国があり、同じ民族でも国によって置かれている立場が異なり、共生の仕方も多様である点を中国系住民を通して理解する。	

(4) **評価の観点**　①東南アジア諸国の中での中国系住民の人口の多さと、社会的な地位の重要性を理解できたか。②タイとマレーシアにおける中国系住民の現地社会との関係は異なり、その背景には教育制度や宗教の違いなどがあることが理解できたか。③東南アジアの中でも国によって民族構成が異なり、さまざまな形での中国系住民と先住民族との共生がみられることが理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①民族・宗教を扱う際には、統計などを利用して客観的に、かつ公平に扱うように考慮する。②資料の提示方法に留意し、ただ資料を読ませるだけにならないようにする。③「東南アジア」の単元の中で扱うため、中国系住民と東南アジアの先住民族との関係に限定して扱う。

5．オセアニアのミニ国家・地域からみた人々の生活と文化

(1) **教材として取り上げた理由**　オセアニア地域は、東西14,000km、南北10,000kmもの広大な範囲で、地球の表面積の三分の一程にも及ぶ面積である。しかし、この地域に関する私たちの知識や情報は乏しく、理解度も低い。また、授業で扱う機会も、太平洋の島嶼については非常に少ない。また、民族的にもオーストロネシア語族に関して取り上げる教材が比較的少ない。そこで、本研究では、大国の支配の中で揺れ動いてきた、太平洋の小さな国々・地域を取り上げ、そこで暮らす人々の生活・文化の多様性を考察し、自然環境との関連や社会的な背景などを含めて学習することをねらいとして取り上げた。

(2) **本時のねらい**　本時は4時間構成のうち、第3時限に当たる。第1時限では、オーストロネシア語族の分布や移動、オセアニア地域の地理的・歴史的な位置づけをおこなう。第2時限では、自然環境との関連について、サンゴ礁の形成などを含めて学習する。第4時限では、オセアニア地域における大国オーストラリアを取り上げ、先住民アボリジニとの関係や共生について学習する。学習指導要領では、「地理A」の「(2)世界のさまざまな人々の生活・文化と交流」の「イ　諸民族の生活・文化と地域性」で扱う。

(3) **展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・「楽園」のイメージと観光地としての島嶼	○印象派の画家ゴーギャンが愛し暮らしたタヒチについて、彼の絵画を見ながら位置を確認する。 ○南太平洋の音楽を紹介し、旅行パンフレットから所要時間や費用などを知る。	・ゴーギャンの絵 ・CD音楽「タヒチ賛歌」
展開	・フランス海外領での人々の暮らし	○フランス領ポリネシアでの人々の暮らしを映像で見ながら、観光と産業について理解する。 ○島民の生活を支える「根菜文化」（タロイモ・ヤムイモ）やパンノキなどの主食について知る。 ○欧米化された人々の暮らしと伝統を守ろうとする動きを知る。	・VTR「南太平洋」 ・図　タロイモ ・図　パンノキ ・図　ヤムイモ
	・経済の基盤	○コプラ（ココヤシの脂肪分）が重要な輸出品であ	・図　ココヤシ

展	について ・核実験と反対運動	こと。黒真珠養殖が日本の技術の伝授により、現在重要な輸出品となっていることを知る。 ○観光が大きな収入源であることを知る ○核実験の強行と反対運動の状況を知る。 ○核関連施設や産業で働く人々が１万人もいることを知る。	・ココヤシの実 ・資料「世界統計年鑑」 ・写真　核実験 ・新聞記事「地下核実験」
開	・ミニ国家ナウルの経済と暮らし ・ナウルの課題	○人口10,000人のナウル共和国の位置を確認する。 ○ナウル経済はリン鉱石の輸出に依存しており、教育・医療費などは無料、所得税もないタックス・ヘブンで南太平洋随一の生活水準であることを知る。 ○資源の枯渇や環境破壊などが大きな課題であり、海外への投資などの対策について理解する。	・ワークシート ・写真リン鉱石 ・資料「開発途上国の基本統計大洋州編」
	・ミニ国家ツバルの経済と暮らし	○人口9,000 人のツバルの位置を確認する。 ○コプラ中心の産業や郵便切手の発行などの経済状況ついて知る。 ○人々の生活を支える漁業について、釣針やアウトリガー・カヌーなどから理解する。 ○日本との貿易・経済協力の現状を理解する。 ○環礁からなる島々で、最高点でも海抜５ｍのミニ国家が地球温暖化問題の中で、水没の危機に直面している事実を理解する。	・郵便切手 ・資料「南太平洋島嶼国の概要 ・図　カヌー ・図　釣針 ・資料「対ツバル貿易・援助」 ・新聞記事「ツバル首相」
まとめ	・ミニ国家の課題と先進国の協力	○「楽園」のイメージとはかけ離れた、厳しい現実があり、太平洋諸国の連帯や、先進国である日本に期待されている役割も大きいことを認識する。 ○地球的課題と国際協力の学習への予告とする。	・ワークシート

(4) 評価の観点　①地域によって異なる人々の生活と文化の特色が理解できたか。②ミニ国家が抱える経済の基盤の弱さと問題点が理解できたか。③人々の生活が自然環境や社会環境と深くかかわりあっていることを理解できたか。

(5) 指導上の留意点　①日本人の尺度やイメージにとらわれることなく、異なる人々の生活や文化の特色を理解させるように留意する。②ＶＴＲや図・新聞記事などの資料がわかりやすく提示できるようにする。③次に学習する、「地球的な課題と国際協力」の学習への関連について生徒に考察させるように配慮する。

Ⅲ 身近な素材を通してみた世界と日本

1．絹織物業の伝播に関わる世界史

(1) 教材として取り上げた理由　世界史において、絹織物はシルクロードを通じて西方世界にもたらされ、高価な物産として取り引きされたことが授業で取り上げられる。日本史においては、古くより各地域の特産品として扱われ、明治維新以降、外貨獲得物産として世界最大の輸出規模を誇るようになったことが取り上げられる。しかし、世界史において、製造業としての絹織物業が西方世界にどのように伝播していったかについて取り上げられることは少ないし、日本における絹織物の現在がどのようになっているかを知る人は少ないであろう。言い換えれば、絹織物というものの存在は認識していても、それが身近なところで使われているという意識は現在薄くなっているといえる。そこで、絹織物業について、世界史の諸事項と関わらせ、日本における近現代の絹織物産業について触れることで、普段見逃されがちな物産に対する生徒の興味・関心を深めさせることを目的として、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい　本時は2時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、導入において、絹を使った様々製品を提示することによって興味・関心を引き出し、絹織物についての基本的な情報と、絹織物業の西方世界や日本への伝播について取り上げる。本時では、ヨーロッパに伝わった絹織物業がその歴史にいかに関わっていたかに触れ、日本の絹織物業の近現代の状況について理解させることを目的とする。学習指導要領では、「世界史Ａ」の「(2)諸文明の接触と交流」のまとめとして、「世界史Ｂ」ではテーマ史として扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・ヨーロッパへの絹織物業の伝播	○ビザンツ帝国が絹織物の生産を独占しようとしたことから、絹織物業をもつことが経済的に大きな効果を持つことを確認する。 ○イスラムとノルマン人の活動によって、絹織物業がその接点であるシチリア島からヨーロッパに伝播したことを確認する。	・地図による絹織物業の拡大の再確認
展開	・ヨーロッパ近代国家の形成と絹織物 ・絶対主義と絹織物業 ・産業革命と絹織物業	○ルイ9世に始まりフランソワ1世をへてアンリ4世にわたって、絹織物業がフランスに導入されたことを知り、導入を必要としたそれぞれの王の直面した課題を理解する。 ○絹織物業の発達は、フランス絶対主義を経済面から支えたが、ルイ14世のナントの勅令の廃止は、多くの絹織物業者をイギリスに亡命させ、絶対主義衰退の一因となったことを理解する。 ○イギリスの伝統的産業である毛織物業と、新たに輸入されるようになった綿織物との衝突により、産	・地図「16世紀のヨーロッパ」 ・史料『キャラコ輸入禁止法』

展開	・西欧と日本の結びつき ・日本の産業革命と絹織物	業革命が発生するが、その際に毛織物業者と手を結んだ絹織物業者の存在を理解する。 ○1840年代、蚕の伝染病の流行によって壊滅的な打撃を受けたヨーロッパ絹織物業界は日本より大量の蚕の輸入をおこなったこと、また同時期に日本の養蚕書がもたらされ、フランス語・イタリア語に翻訳されたことを知る。反対にヨーロッパの養蚕書が日本にももたらされていたことを知る。 ○1880年代後半にフランスの技術などを導入して絹織物産業の産業革命が始まり、1909年には生糸輸出が世界最大になったことを知る。また、その発達が国民の犠牲の上に成り立っていたことを理解する。	・上垣守国『養蚕秘録』および仏訳本 ・資料「日本の品目別輸出入の割合」 ・資料『女工哀史』
まとめ	・世界恐慌から第二次大戦へ ・絹織物業の現況	○1929年の世界恐慌の影響から、生糸輸出が5年間で四分の一にまで激減し、農村や産業界に大きな打撃を与えたことを知り、戦争突入の一つの要因となったことを理解する。 ○世界最大量を誇っていた我が国の生糸輸出が、現在おこなわれていないことを知り、その原因が化学繊維の進出や、産業構造の変化などによることを考察する。また世界の絹織物生産の現況を知る。	・資料「日本の恐慌」 ・資料「絹織物の輸出量推移」 ・資料「世界国勢図会」

(4) 評価の観点　①絹織物が、単なる交易品でなく、歴史上の様々な出来事と密接に関わっていることを理解できたか。②絹織物が自分達の身近に存在することに気づき、興味・関心を深め、我が国が絹織物を通じて世界とつながっていたことを理解できたか。

(5)指導上の留意点　①絹織物業の伝播については、地図を効果的に使用し、その広がりを視覚的に認識できるよう配慮する。②史料・統計については、精選して提示し、時間をかけて読み取らせるよう配慮する。

2．食糧問題から考える世界史

(1) 事例として取り上げた理由　世界の一体化が進むなか、「民族紛争」「食料危機」「環境破壊」など現在地球規模で考えるべき問題が数多く存在する。これらの問題は一見、人類が過去に直面したことはなく、複雑で解決は難しいようにみえる。しかし、歴史的経緯を認識・把握することにより、解決への糸口を探ることも可能である。そこでこれらの問題のうち、特に人間の生存にかかわり、また生徒にとっても身近な話題である「食糧」問題を中心に、世界史学習のまとめとして、歴史に鑑みて問題解決に取り組む姿勢を育てることを目的に本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい　本時は3時間構成の第3時限にあたる。第1時限では、古代文明の盛衰を食糧獲得の術としての農耕と環境負荷の観点から理解する。第2時限では16世紀以降の植

民地政策の一環としてのモノカルチャーと江戸時代の農業を比較検討し、環境に対する影響力を考える。本時では「食糧」を題材として日米関係を中心に冷戦構造の知識理解に偏りがちな現代史に新たな観点を示す。また環境破壊が叫ばれる中、日本が今後「食糧」に対してとるべき方策をも考察させる。学習指導要領では、「世界史A」の「(4)現代世界と日本」の「オ　科学技術と現代文明」または「カ　これからの世界と日本」、「世界史B」の「(7)現代の課題」の「イ　科学技術の発展と現代文明」または「ウ　これからの世界と日本」で扱う。また、本時に限ってならば、「日本史A」「(5)現代の世界と日本」、「日本史B」の「(7)現代の世界と日本」で扱うもことも可能である。

(3)　展開例

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・日本の食糧事情（過去・現在）	○家族や高齢者などに食の体験、給食の体験などについてインタビューを行い、結果を発表する。 ○インタビューの発表を聞いて、グラフを作成し、自らの体験との違いを確認する（給食の主食がパン主体なのか、米飯主体なのかなど）。また、その違いが生じた理由を考える。	・ワークシート
展開	・給食メニューの輸入食品	○実際の給食のメニューからどのような食糧・食品が輸入されているのか考える。（大豆製品、小麦製品、肉類、果実類、砂糖に特に注目する。）	・給食のメニュー
	・日本の食糧自給率	○1995年の食糧自給率表から特に小麦や大豆、肉の輸入依存度が高いことを確認する。また、自給率が次第に下がっていったことを確認する。	・食糧自給率表
	・小麦の自給率が低い理由	○さきほど確認した品目の中で小麦を取り上げ、自給率が下がっていった経緯を学校給食を中心に、また、国際情勢ともからめながら理解する。 ①ララ物資、ガリオア資金、ＭＳＡ援助小麦 PL480号　②商業としての小麦貿易 ○日本人の嗜好の変化について確認する。	・ワークシート ・学校給食法 ・キッチンカーの写真 ・年表
	・食糧は「兵器」なのか	○アメリカ合衆国の小麦戦略の意味を確認する。 ○アメリカ合衆国が食糧を「兵器」として使った例を知る。	
	・ＥＣの農業政策	○ＥＣの共通農業政策と日本の戦後の農業政策の違いを確認する。	・ワークシート
まと	・遺伝子組み替え作物登場	○遺伝子組換え作物の登場も食糧を国際政治の武器として扱う例としても考えることも可能なこと、それは歴史的経緯を把握することによって明確化することを確認する。	・『遺伝子組換え食品の検証』

め	・食糧から今後の世界を考える	○学習のまとめとして、「食糧」を中心にすえて今後の世界のあるべき姿、日本の果たす役割などを考察する。	・ワークシート ・意見文の作成

(4) **評価の観点**　①日本の現在の食糧自給率の低さが理解できたか。②小麦の自給率が下がった背景に日米関係があることが理解できたか。③現代的な問題についても歴史的経緯をたどってみることにより、さまざまな観点をえられることが理解できたか。

(5) **指導上の留意点**　①世界史では統計資料（グラフや表）などを扱うことが少ないので、生徒がきちんと読み取っているか配慮する。②生徒インタビューでは事前にワークシートを配布し、そのポイントを示す。③小麦の自給率が下がった経緯については、国際情勢の流れの中で把握させる。

3．米国籍企業を通して見た世界と日本

(1) **教材として取り上げた理由**　現在、我々の身近にはアメリカ合衆国生まれの多国籍企業が多数存在している。これらの企業は現代社会に物質的豊かさと快適な生活をもたらすような世界的・大衆的商品を生み出しており、全世界にさまざまな影響を与えている。1960年代後半からの日本とアメリカの歴史を学習することは、世界の一体化と現代世界史を理解するための一つの方法である。そこで本研究は、このようなアメリカ合衆国生まれの多国籍企業の一つで大衆的・世界的商品を生み出したM社を取り上げることで、現在も進行しつつある、国家の壁を超えたボーダレス・グローバルな時代についての認識を深めるために本教材をとり上げた。

なおM社を取り上げたのは、①生徒にとって身近な存在の企業である。②モスクワへの出店などが世界的に話題となり、世界の一体化を生徒に理解させやすい。等の理由からである。

(2) **本時のねらい**　本時は4時間構成の第4時限にあたる。第1時限では第一次世界大戦後の1920年代に空前の繁栄を誇ったアメリカ合衆国の経済を扱う。第2時限では世界恐慌と各国の対応について学習する。第3時限では1945年～60年代のアメリカ合衆国と冷戦について学習する。本時では1960年代後半からの日本とアメリカの経済と世界の一体化（ボーダレス化・グローバル化）について考察させる。学習指導要領では、「世界史A」、「(4)現代世界と日本」の「イ　アメリカ合衆国とソビエト連邦」、「世界史B」の「(6)20世紀の世界」の「アメリカ合衆国と自由主義諸国」で扱う。

(3) **展開例**

	学習項目	学　習　活　動	備　考
導入	・アメリカ生まれの商品	○戦前アメリカ合衆国で普及した商品について確認する。	・朝日百科「世界の歴史」119巻
展開	・現在の我々が接するアメリカ企業・商品 ・貿易・資本	○身近な企業・商品、例えばファーストフード、清涼飲料水などを発表させていく。 ○米国籍企業から受容したものが日常生活の多岐にわたっていることを確認する。 ○1967年から段階的資本自由化が開始された結果、	・資料「食と農の戦後史」 ・年表

展開	の自由化	アメリカ系の多国籍企業が日本進出のきっかけをつかんだことを知る。 ○高度経済成長期に政府によって保護されてきた日本の産業が競争に直接さらされることになったことを理解する。 ○身近にある企業としてM社の日本進出が1971年であったことを知る。 ○ファーストフード流行の理由を考える。 ①コメ離れ・肉食など食生活が変化したこと。 ②早くでき、手軽に食べられるということが日本人の食習慣にあっていたこと。 ③アメリカの物質的に豊かな生活があこがれの対象となっていたこと。	・資料「食と農の戦後史」 ・日本国勢図会
	・M社の成長とグローバル化	○M社が日本と世界で店舗数と売上高をのばしていった過程と現在を知る。 ○アジアで最初に出店したのが日本であり、現在日本の店舗数が世界第2位であることを知る。 ○マニュアル化されたサービス・便利さと効率化の追求・商品の品質の均一化・共通かつ多様なメニュー・広告と宣伝の重視などM社の特徴そのものが経済的普遍性をもっていることを理解する。	・資料「M社の店舗数と売上高」 ・資料「各国のM社のメニューなど」
	・冷戦終結後の状況	○1989年に東西冷戦が終結し、1990年に資本主義の象徴であるM社がモスクワに出店した意義について考察する。 ○1991年のソ連消滅など社会主義体制の崩壊が経済のボーダレス化・グローバル化を進行させたことを理解する。 ○肥大化した多国籍企業と資金・人・技術などが国境を越えて移動する経済の開放体制を理解する。	・新聞記事「冷戦終結」・「M社のモスクワ出店」・「ソ連消滅」 ・日本国勢図会
まとめ	・ボーダレス・グローバル化の問題点	○世界経済の一体化が飛躍的に進んだが、その一方で画一的消費文化の拡大や競争の激化などを生みだしたことを認識する。	・新聞記事「リヨン・サミット」

(4) 評価の観点　①米国籍企業（主にM社）が日本と世界に進出できた理由について考察することができたか。②現在の国際情勢と日本の状況に関心をもち、ボーダーレス化・グローバル化が進展する傾向にあることを理解できたか。

(5) 指導上の留意点　①身近にある米国籍企業・商品を例にとることで、1960年代以降のアメリカと日本についての現代史が理解できるように留意する。②新聞を読むことが現代史を把握する一つの方法であることを説明する。